

昭和61年度

唐古・鍵遺跡

第29・30次発掘調査概報

1987

田原本町教育委員会

序

豊かな田園地帯を擁する田原本町は、奈良盆地の中央にあって古代より稲作文化の栄えたところではあります。本町には稲作が伝播した初期からの大遺跡、唐古・鍵遺跡があります。

この唐古・鍵遺跡の調査も既に30次を終え、二千年前の弥生ムラの様子が徐々に明らかにされつつあります。第29・30次調査は、唐古・鍵遺跡の西端と北端の調査で、ムラを囲む環濠を検出し、遺跡の範囲をおさえることができました。

さて、本書ではこのような第29・30次調査の成果を調査概要としてまとめることができました。本書に示した調査成果が幾分なりとも御活用いただければ幸いに存じます。しかしながら、不備、不足な点があるかと思えます。御批判、御教示を賜われれば幸甚です。

今後もおって調査を実施していく予定であり、あわせて唐古・鍵遺跡の史跡指定にむけ準備を進めているところでもあります。どうか関係各位のご協力とご指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会

教育長 岩井光男

例 言

1. 本書は、田原本町教育委員会が下水路改修工事及び道路改良工事（田原本町建設課）に伴う事前調査として実施した唐古・鍵遺跡第29・30次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、橿原考古学研究所の指導を得、田原本町教育委員会社会教育課がおこなった。現地調査は藤田三郎があたった。
3. 調査にあたっては、唐古自治会長 中村隆一氏をはじめ、唐古及び鍵在住の方々に御理解と御協力を賜わった。記して感謝します。
4. 調査補助員として、広川守・河野一隆・多賀茂治（京都大学）、安藤広道（慶応大学）、豆谷和之・廣瀬克彦・久山高史・三沢由美・宇野祐子（奈良大学）、真鍋成史・天石夏実・松井慎一郎（同志社大学）の学生が参加した。
出土遺物の整理作業にあたっては、上記学生の他、桑原久男（京都大学大学院）、梅原一恵・河野典子・宮崎玲子・岡坂和子・福島加代子・末広真理子の諸氏の協力があった。
5. 本概報の執筆及び編集は、藤田がおこなった。

目 次

I. はじめに	1
II. 第29次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	3
2. 遺構と遺物	
(1) 堆積土層	4
(2) 遺 構	5
S D-101、S D-102、S D-103・S D-104、S D-105	
S D-106・S D-108、S D-107、S D-109、S D-110	
(3) 出土遺物	7
S D-107出土土器、S D-110出土土器	
S D-109出土土器、S D-110出土木器	
3. ま と め	10
III. 第30次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	11
2. 遺構と遺物	
(1) 堆積土層	12
(2) 遺 構	13
S D-101、S D-102・S K-101、S D-103、S D-104、落ち込み状遺構	
(3) 出土遺物	14
3. ま と め	15

I. はじめに

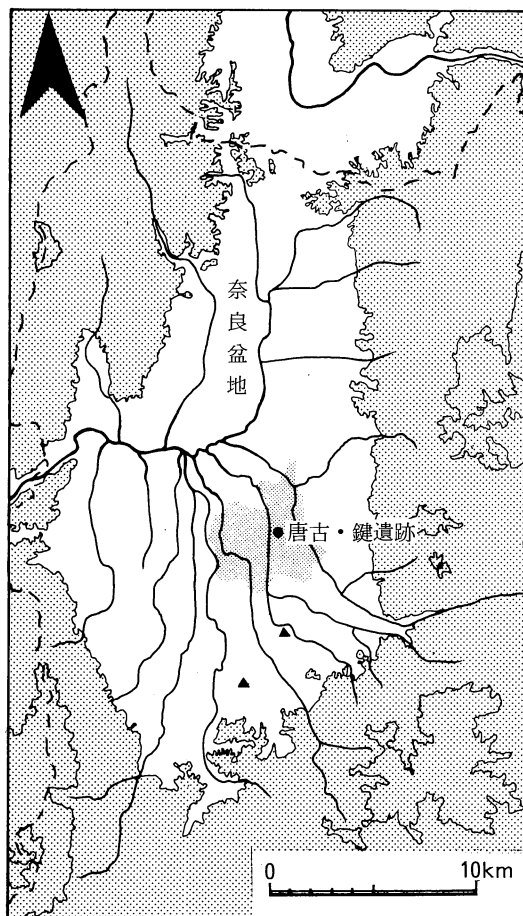
昭和61年度の唐古・鍵遺跡の発掘調査は第26次調査（唐古池）、第27次・第28次調査（遺跡の東端）を既に終え、今回、報告する第29・30次調査を合わせて計5件の調査であった。第26次調査を除き、全て遺跡の周局的で開発行為に伴うものであったにもかかわらず、遺跡の範囲を確認できる成果があげられた。本年度の調査は民間による開発ではなく、公共事業が4件も占めていた。いずれも、老朽ため池工事や用水路整備という止むない事業であったが、遺跡地への破壊は小規模なものであった。しかし、遺跡の景観は年々変貌し、田舎の田園風景は消えつつある。

第1表 本書掲載発掘地

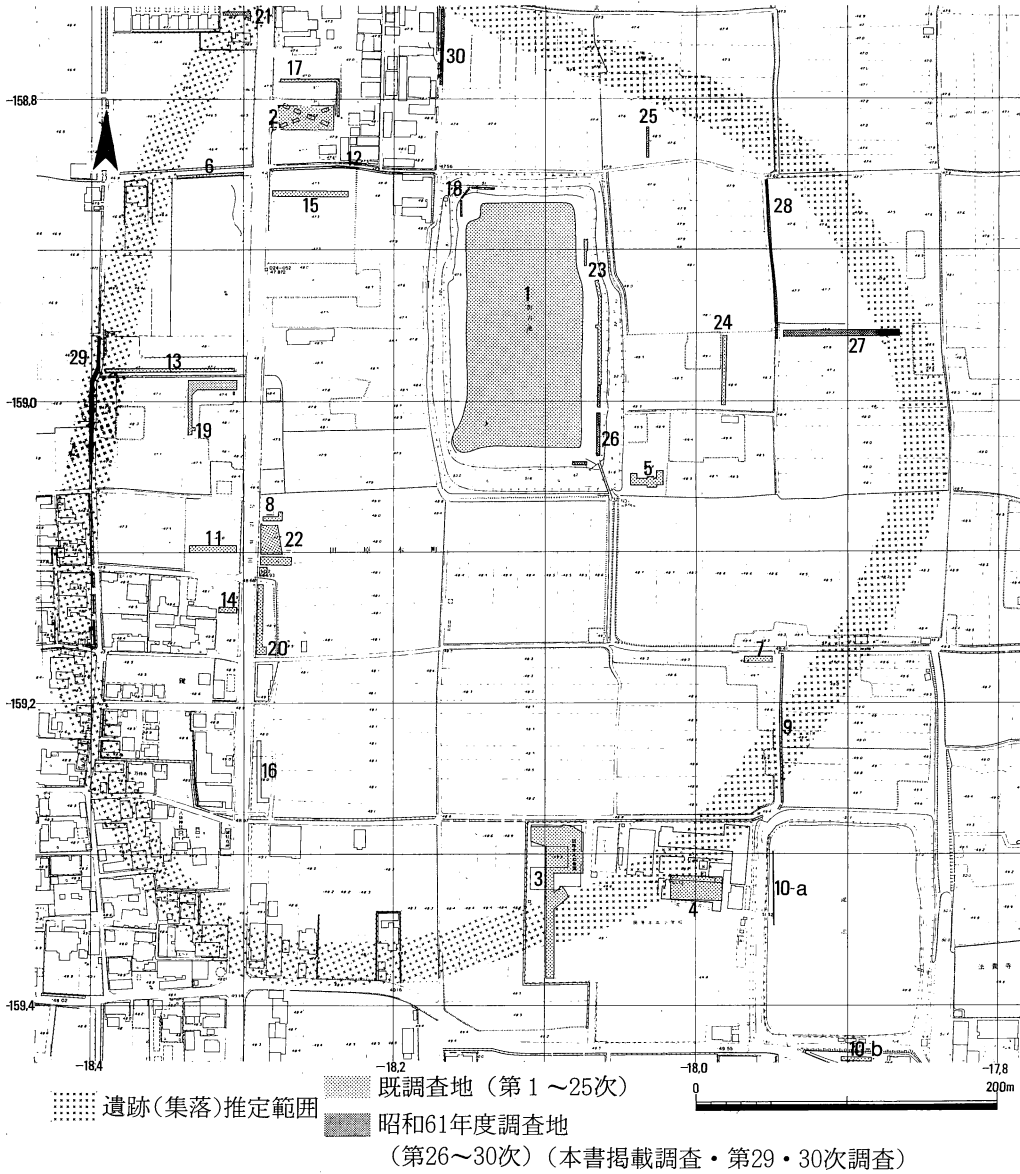
調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第29次	田原本町唐古	下水路改修工事	水路	国	1987. 3. 4～4. 6	260㎡
第30次	田原本町唐古	道路改良工事	道路	田原本町	1987. 4. 6～4. 10	150㎡

第26次調査については『田原本町埋蔵文化財調査概要7』、第27・28次調査は『田原本町埋蔵文化財調査概要8』を参照されたい。本書に掲載した分は第29・30次調査分となる。

第29次調査は第13次調査地の西側で、遺跡の西端にあたる。現水路内の発掘であったため、十分な調査はおこなえなかったが、ムラを囲む環濠を7条検出し、ムラの範囲を知る重要な成果となった。また、第30次調査は第12・18次調査地の北側で、遺跡の北端にあたる。本地は現道路敷内で、道路下には唐古池からの暗渠がつくられており、遺構の残存状況は極めて悪かった。しかし、本調査地においてもムラを囲む環濠を4条検出し、ムラの北端を知ることができた。いずれの調査もムラはずれにあたる場所であったことはムラの範囲を推定する上で重要な成果となった。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置



第2図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

Ⅱ．第29次発掘調査の概要

1．調査の全容

本調査地は遺跡の西端にあたる。本地の東の調査としては第11、13、19次調査がおこなわれている。第13、19次調査ではムラを囲む環濠を検出しており、本調査との遺構の関連が注目されるところであった。また、第11次調査地は本調査地から東へ70 m程のところで居住区となっている。したがって、国道24号線から西側は遺跡の西端で、居住区から環濠帯の地区にあたるであろう。

調査は、現水路となっており、水を止められないままの調査となった。その為、降雨時にはトレンチが満水になって、水路に変貌するという悪条件で、調査は困難を極めた。トレンチは用水路の擁壁工事の掘り方にあわせて設定した。トレンチ幅は2～3 m、長さ105 mという南北に細長いトレンチとなった。トレンチは水路にあわせている為、トレンチの南半はやや屈曲している。調査は第Ⅰ～Ⅳ層までの水田耕土、床土層、里道などの土層を機械力をもって除去し、その後、人力による遺構検出作業と調査を進めた。調査は工事の工程上、ほぼ三回に分かれる調査となった。

遺構はトレンチの全面において検出した。しかし、用水路となっていたため、遺構の残存状況は極めて悪いものであった。弥生時代の遺構面の上には江戸時代の包含層が形成されていた。この包含層はトレンチ南半に厚く堆積し、これを除くと弥生時代の各遺構が検出できた。中世の遺構はトレンチ北端で溝と土坑を検出した。これが、唐古氏の館跡のものかどうかはわからなかった。弥生時代の遺構は大溝が主で、唐古・鍵ムラをめぐるものと考えられた。溝の時期は違うが、延長105 mにわたって大溝群が並走していたことはムラの範囲を考える上で重要な調査となった。

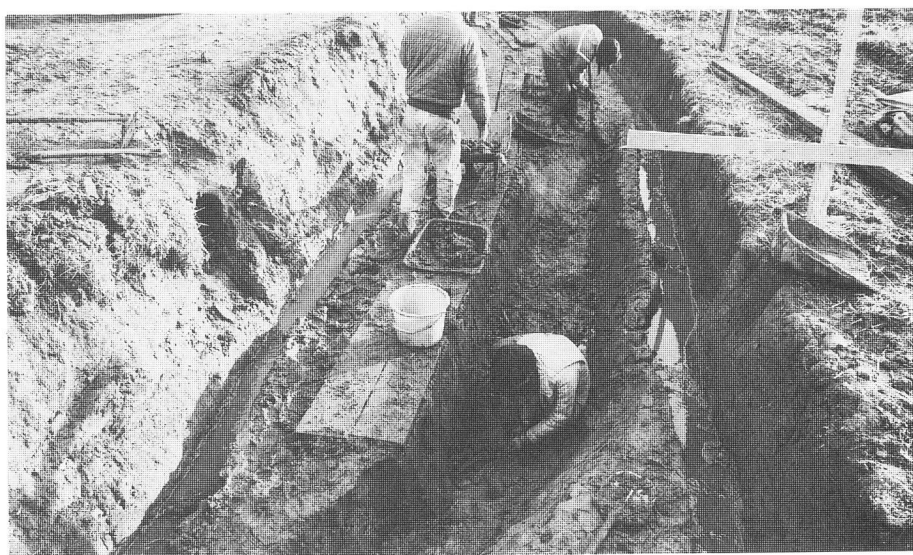
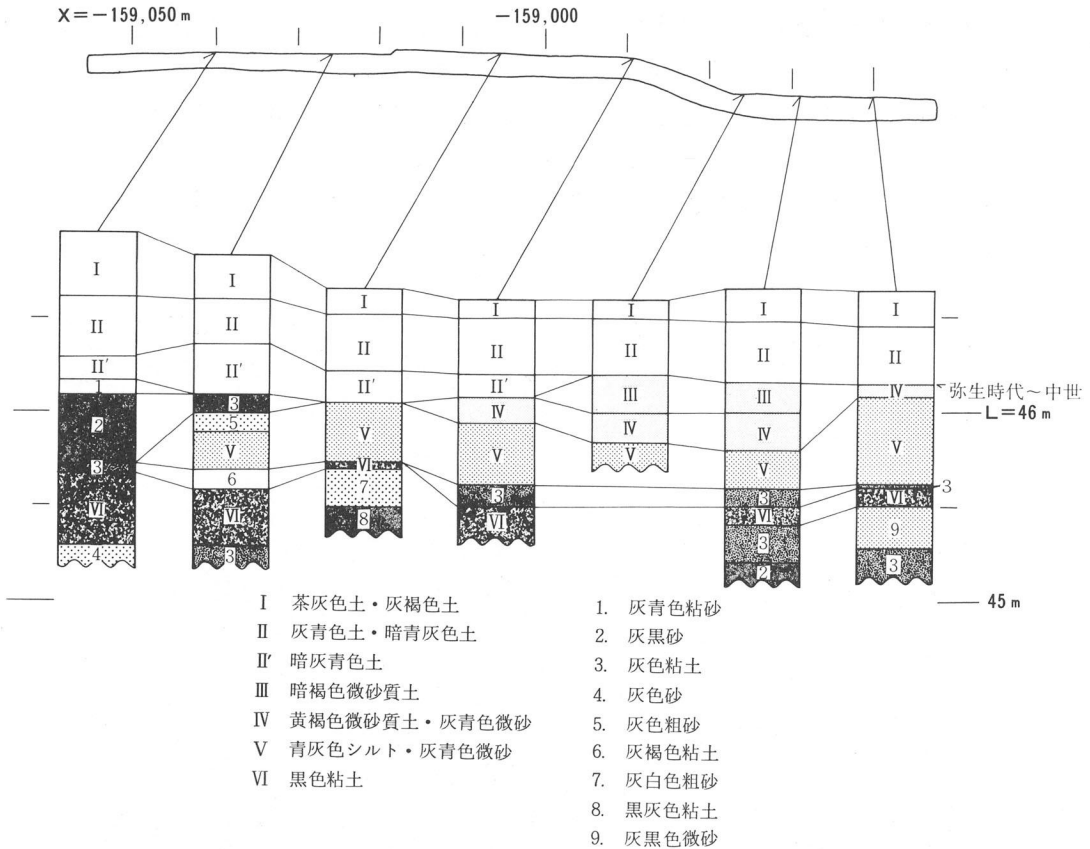


写真1 第29次調査 調査風景

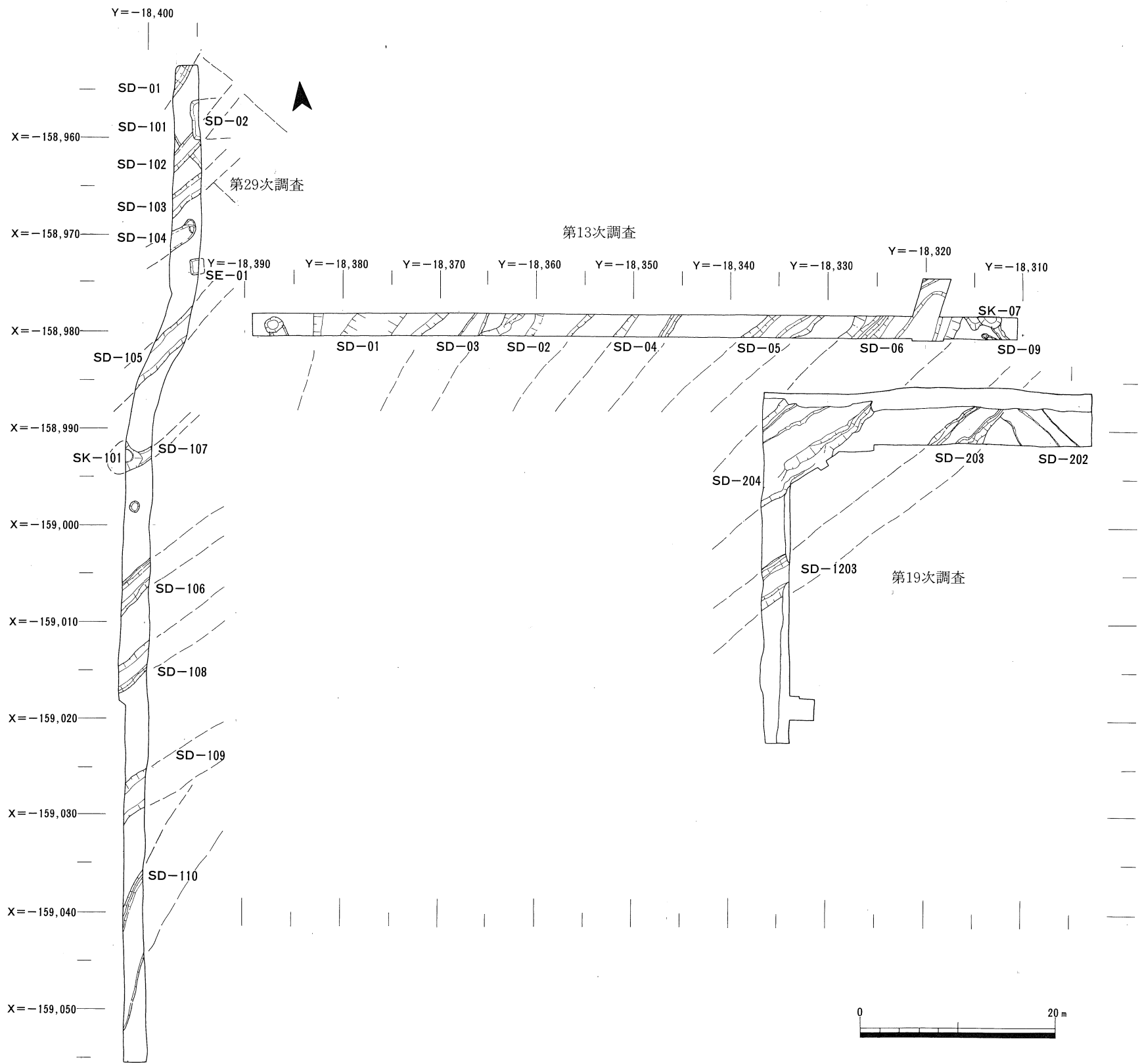
2. 遺構と遺物

(1) 堆積土層

第29次調査地は遺跡の西端で、南北105 mにわたるため、堆積土層は複雑である。基本的な堆積土層は次のようになる。第I層：灰褐色土層（水田耕土層）、第II層：暗青灰色土層（水田床土層）、第II'層：暗灰青色土層、第III層：暗褐色微砂質土層、第IV層：黄褐色微砂質土層や灰青色微砂層、第V層：灰青色微砂層、第VI層：黒色粘土層となる。第I層と第II層はトレンチ全体に拡がり、第II層は厚さ30 cm程で安定した堆積をしている。第II'層はトレンチ南半に堆積した土層で、近世以降の堆積層である。第III層以下は弥生以前の堆積層である。第III～V層は微砂層で、トレンチ全体にみられるが、北へいくほど標高が高くなる。南端では第V層の上に灰色粘土が堆積し、遺構面となる。第III層以下では第VI層の黒色粘土層が安定した堆積をしている。トレンチ南端では30～40 cmの厚さとなる。この第V層と第VI層は遺跡全体にみられる土層である。しかし、遺跡の微高地に堆積する黄褐色粘質土がみられないことから（第V層上面の灰色粘土が対応？）本調査地が微高地の縁辺部に立地すると思われる。遺構は第III層上面より弥生時代から中世に至る遺構を検出している。標高46.1～46.2 mである。



第3図 第29次調査基本土層関連図



第4図 第13・19・29次調査遺構平面図 (S = 1 / 500)

第2表 第29次調査溝一覧表

溝番号	規模 (m)		溝底 標高	走行方向	弥 生					古墳 前 後	主要遺物	備 考
	幅	深度			I	II	III	IV	V			
SD- 01	1.5 以上	0.9 以上	—	南西—北東								時期不明
SD- 02	4.2	0.2	—	西—東								収束する 中世
SD-101	4以上	0.9 以上	—	南東—北西				---				
SD-102	2	1.1	45.1	南西—北東				----				
SD-103	2.5	1.3	44.9	南西—北東				---				
SD-104	2.0	1.0	45.2	南西—北東								収束する 時期不明
SD-105	2.1	0.8	45.3	南西—北東				----				
SD-106	2.3	0.7	45.3	南西—北東				---				
SD-107	1.1	0.3	45.7	南西—北東		←					完形土器	
SD-108	2.4	0.5	45.5	南西—北東				---				
SD-109	3.2	0.9	45.3	南西—北東				←-----				再掘削
SD-110	3.5	0.9	45.2	南南西—北北東				←-----			完形土器	

(2) 遺 構

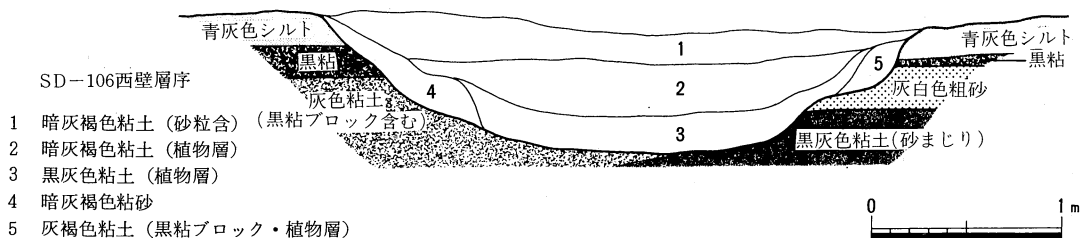
本調査では、トレンチ全面において遺構を検出した。遺構は大溝と土坑で、柱穴などは検出していない。時期的には大別すると弥生時代の中世の遺構になる。弥生時代の大溝はほぼ等間隔に並走するように検出したが、トレンチの北端では走向方向が反対になるものが1条ある。土坑はトレンチのほぼ中央部で二基検出したのみである。中世の遺構はトレンチの北半のみで検出した。唐古氏館跡の大環濠の推定ラインには大溝等の遺構は検出できなかった。

SD-101

SD-101はトレンチの北端で検出した大溝である。溝幅4m以上を測る大溝で、南東から北西方向に走向する。溝は深さ0.9mまで確認したが、完掘していない。溝の堆積の上部は砂や砂質土、粘土などで構成され、互層になっている。遺物は少なく、第V様式の土器片を少量検出している。

SD-102

SD-102はSD-101と交叉する南西—北東方向に軸をもつ溝である。溝幅は約2m、深さ1.1mを測る。溝の堆積土は五分層され、溝の中位には植物層である黒褐色粘土層がある。上層は暗灰褐色砂質土で、SD-101の埋土と同質である。このことから、SD-101との前後関係は同時開口で、埋没も同じ時期と思われる。



第5図 SD-106西壁土層断面図 (S = 1/40)

SD-103・SD-104

SD-103はトレンチの北端、SD-102の南側、2 mで検出した溝でSD-102と並行する。溝幅2.5 m、深さ1.3 mを測る。溝の堆積は上層に灰黄色粘質土が覆い、SD-102の上部まで及ぶ。下層は青灰色・黒灰色粘土層で形成される。出土遺物は土器小片のみである。溝の時期はSD-102と同時期で第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の時期と思われる。

SD-104の主軸はSD-102・SD-103に並行しているが、溝の東端が収束している。収束部分は深くなり土坑状である、粘質土・粘土層で形成される。時期は不明だが、弥生であろう。

SD-105

SD-105はトレンチの中央北よりで検出した大溝である。溝の走向方向は南西—北東方向である。溝の幅は2.1 m、深さ0.8 mと比較的浅い溝である。溝の上層に暗灰褐色砂質土、中層と下層が灰色粘土層である。土層の堆積は単純な安定した堆積である。遺物は下層より先端の焼けた木材、土器片を利用した紡錘車などを検出した。溝の時期は第Ⅳ様式を前後する時期であろう。

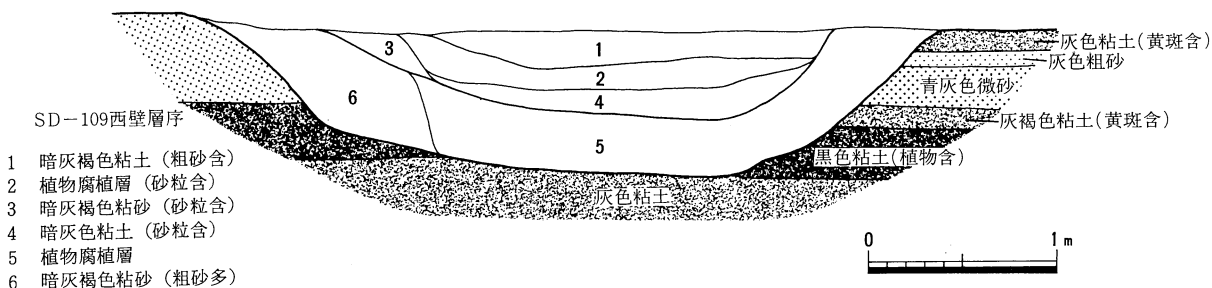
SD-106・SD-108

SD-106はトレンチのほぼ中央で検出し、SD-108はSD-106の南3.5 mで検出した大溝である。両溝ともに南西から北東方向に走向する溝で、並走している。SD-106は溝幅2.3 m、深さ0.7 mを測る。溝の断面形態は浅いU字形を呈す。溝の堆積は三分割でき、上層と中層が暗灰褐色粘土、下層が黒灰色粘土で構成される。遺物は前期・中期の土器を含んでいる。一方、SD-108は溝幅2.4 m、深さ0.5 mの浅い溝である。溝の堆積は上層：黒褐色粘質土、下層：植物腐植土層で単純な構成である。遺物は弥生中期の土器数点が出土している。溝の時期はSD-106、SD-108ともに土層の形成や出土土器から、弥生時代前半と考えられる。

SD-107

SD-107はSD-105とSD-106のほぼ中間で検出した小溝で、走向方向もこれらと同じである。溝幅1.1 m、深さ0.3 mで、暗灰色微砂質土が堆積している。完形の高杯が出土した。

L = 46.5m



第6図 SD-109西壁土層断面図 (S = 1 / 40)

SD-109

SD-109はトレンチの南端ちかくで検出した大溝である。溝の走向方向は南西から北東方向である。溝幅3.2m、深さ0.9mを測る。溝の堆積は層序関係から再掘削されていることが判断でき、古い溝は植物腐植土層と暗灰褐色粘砂層で形成され、植物腐植層を切って新しい溝がつけられている。遺物は混在しており、第Ⅲ様式から第Ⅴ様式までの土器がいっしょに出土している。溝の時期は古い溝が中期前半、再掘削が第Ⅴ様式初頭、埋没が第Ⅴ様式終末と考えられる。

SD-110

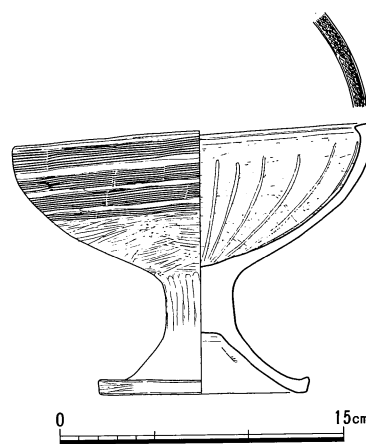
SD-110はトレンチ南端で検出した大溝で、南南西—北北東方向に軸をもつ。溝幅3.5m、深さ0.9mで、比較的大きい溝である。溝の堆積は上層：灰褐色粘土、中層：植物腐植土層、下層：灰黒色粘砂、最下層：灰色粘土で構成され、安定した堆積である。遺物は中層より完形の短頸壺や長頸壺、柄付鍬の破損品が出土した。土器はかなり混在しており、上層や中層では第Ⅲ様式から第Ⅴ様式初頭の土器がいっしょに出土しているが、中層では第Ⅴ様式初頭の土器が大半を占める。土層では確認できないが、再掘削されているようである。

(3) 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少量である。土器がもっとも多く、木製品・石器はわずかである。大半は溝から出土したもので、トレンチの南方へいくほど遺物量は多くなる。

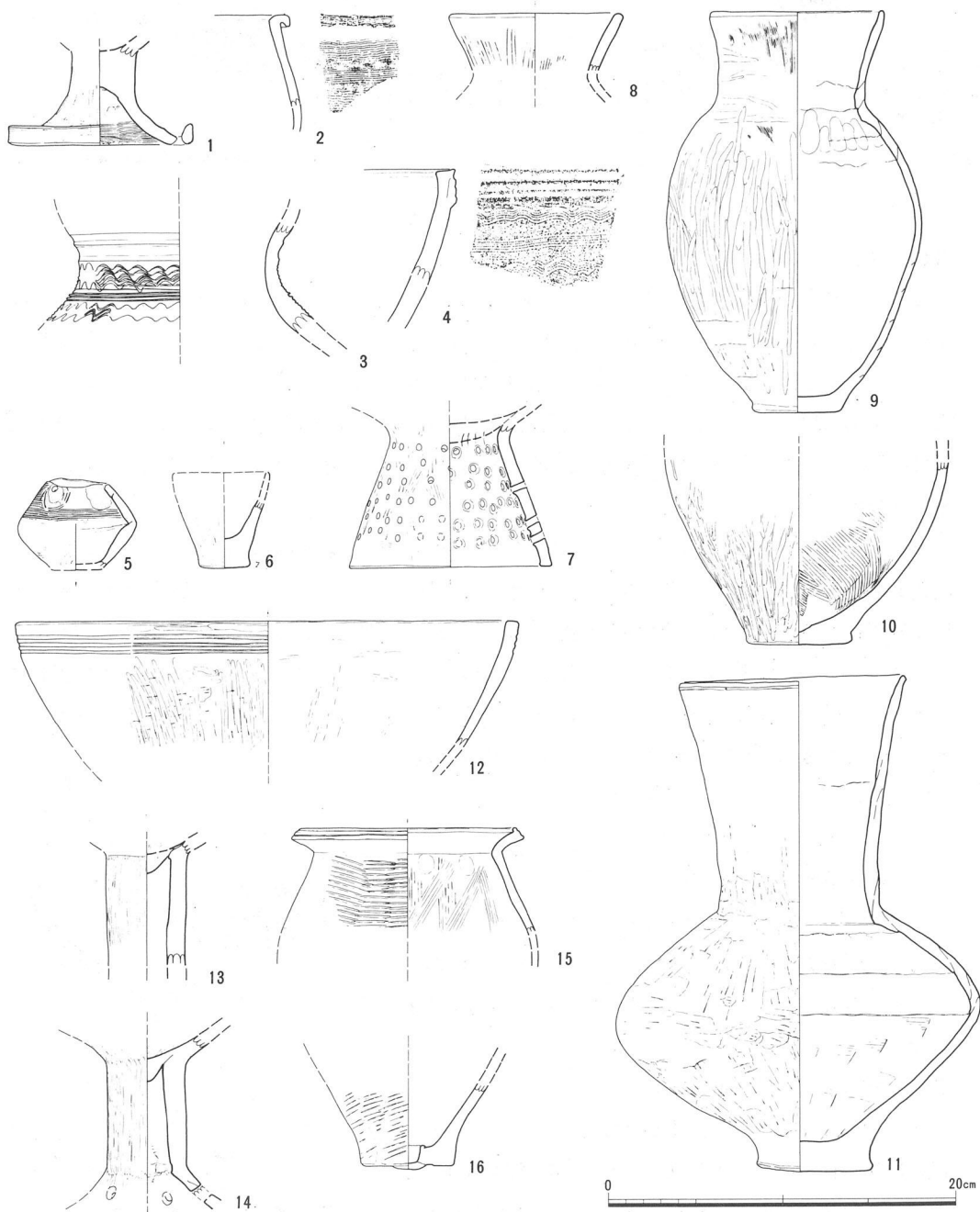
SD-107出土土器 (第7図)

第7図は杯部の一部を欠くがほぼ完形の高杯である。浅い椀状の杯部に中実の脚部がつく。口縁部は内側へ突出する。口縁部上面には櫛描波状文、杯部外面に直線文

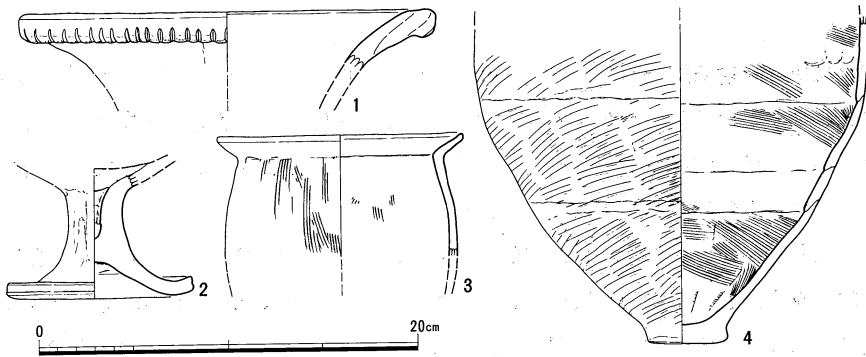


第7図 SD-107出土土器 (S = 1/4)

を継ぎ描きでめぐらしている。内外面ともに丁寧なミガキが施され、特に杯部内面には放射状に暗文（ミガキ）をつける。



第8図 SD-110出土土器 (S = 1 / 4)



第9図 SD-109出土土器 (S = 1 / 4)

SD-110出土土器 (第8図)

3・4・7・15は上層、1・2・13は下層、その他は中層より出土した。1・2は第Ⅲ様式の高杯と台付鉢である。1は中実の短い裾の広がる脚部である。裾部には焼成後の穿孔が二孔一対あけられる。2は口縁を折り返したもので、端部と鉢上段に櫛描簾状文を施す。下段は直線文である。3～5・7は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけての土器である。3は大形の細頸壺で、頸部上端には凹線文、下段には櫛描文がめぐらされる。4は大形鉢で、口縁端部は肥厚し、擬凹線をめぐらす。体部には櫛描波状文と直線文が描かれる。5はミニチュアの水差形土器を無頸壺に転用したもので、剝落した把手部分に紐孔を穿っている。7は台付鉢の脚台部である。8～16は第Ⅴ様式初頭の遺物である。8～10は短頸壺で、9は完形品である。外面は粗いミガキで調整している。11は半完形の長頸壺である。体部は扁球形に張り、長い頸部がつく。頸部下から体部にかけてケズリをおこなう。形態的に整っているが、調整の丁寧さには欠く。12は鉢で、口縁部に三条の擬凹線をめぐらす。体部はケズリの後ミガキを施す。13・14は高杯で、柱状の脚部である。円盤充填をおこなう。外面は丁寧なミガキを施す。15・16は中形の甕である。15は口縁部をハネ上げ、二条の擬凹線をめぐらす。16は有孔甕の孔を外側から粘土で充填している。

SD-109出土土器 (第9図)

1・2は第Ⅲ様式初頭の広口長頸壺と高杯である。1は口縁端部を肥厚し、下端にヘラによる刻目をいれる。2は中空の脚部を上下から粘土を充填し、中実にみせるものである。3は第Ⅴ様式初頭と思われる甕である。4は第Ⅴ様式後半の甕で体部中位が張る。分割成形痕をよく留める。

SD-110出土木器 (図版8-5)

図版8-5はSD-110中層より出土した広鋏である。柄が装着されたままで検出した。身は頭部付近から内湾ぎみに広がり、刃部は直線になる。身の前面の頭部付近には低い段をつくっている。身は刃部と側辺の一部を欠失する。柄の装着角度は鋭角につく。

3. まとめ

第29次調査は唐古・鍵遺跡の西端に位置し、南北に延長105mのトレンチを設けることができた。現水路という悪条件であったが、ムラを囲む環濠など弥生時代の諸遺構を検出し、大きな成果があった。周辺では第13次調査や第19次調査で環濠を検出しており、これらの成果を合わせると唐古・鍵ムラの西端の様相が鮮明になってきた。

第19次調査地付近が弥生時代の微高地の縁辺にあたり、本地より北西方向に緩やかに低くなる。この調査ではムラを囲む一番内側の環濠(SD-204)を検出している。第13次調査ではこの環濠より外側にあたり、弥生時代中・後期の環濠(SD-01・SD-02・SD-04・SD-05)を調査した。今回の第26次調査はこの第13次調査の西端から外側に対応するものである。このような位置関係から環濠が形成される地域、すなわち、環濠帯とよぶべき地域の幅はムラの西北地域で約100mにも及ぶ。このような環濠帯は唐古・鍵ムラの東地域でも確認しており、ここでも幅約150mの帯状に環濠帯がある。このように唐古・鍵ムラの西端及び東端は微高地の縁辺部となり、弥生時代を通じて環濠の掘削される帯状の地区がその立地条件より形成されることになる。今後、唐古・鍵ムラの北端及び南端においてもこのような環濠帯が検出されるのかどうか課題となる。

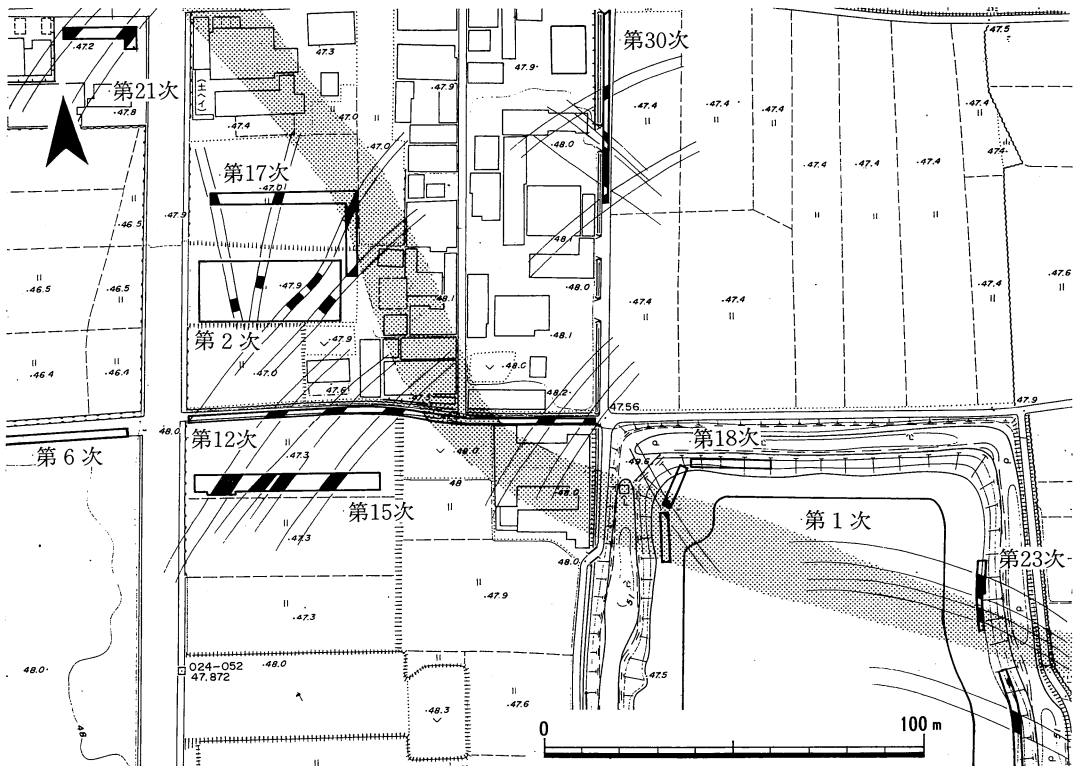
さて、第29次調査における大溝の変遷と第13次調査で検出した大溝との関係についてまとめておきたい。第29次調査において検出した大溝は出土遺物が北へいくほどぐわずかとなり、溝の掘削・開口・埋没の各時期をおさえることは極めて難しい。最も古い溝はSD-107で第Ⅱ様式となるが、これは溝の規模から環濠として考えにくい。SD-102・103・105・106・108は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式頃に開口していると思われるが、SD-104については時期不明である。第Ⅴ様式後半においてはSD-109・SD-110が再掘削により開口しているようである。これらの溝のうち、SD-102・SD-106、SD-108・SD-109・SD-110の堆積には植物腐植土層があり、よく似た堆積状況を示す。このような植物腐植層は第13次調査の溝において顕著でなく、また、逆に第13次調査において検出した溝内の砂層堆積は第29次調査にはない。これは微高地縁辺部の北斜面にあたるか、西斜面に位置するものかの差であろう。さらに、溝の時期の照合においても合致しにくい。第29次調査では遺物が少ないため厳密さに欠けるであろう。第29次調査において検出した溝の方向性からみると、第29次調査のSD-106が第13次調査のSD-02、SD-108がSD-04、SD-109がSD-05、SD-110がSD-01となるが、断定できない。今後、これらの溝の間を調査し、検討する必要がある。以上のように、溝の所属時期の解明はムラの消長を考える上で重要であり、今回の調査では不充分におわったが、ムラの範囲をおさえるという点においては規模がさらに大きくなり、成果をあげることができた。

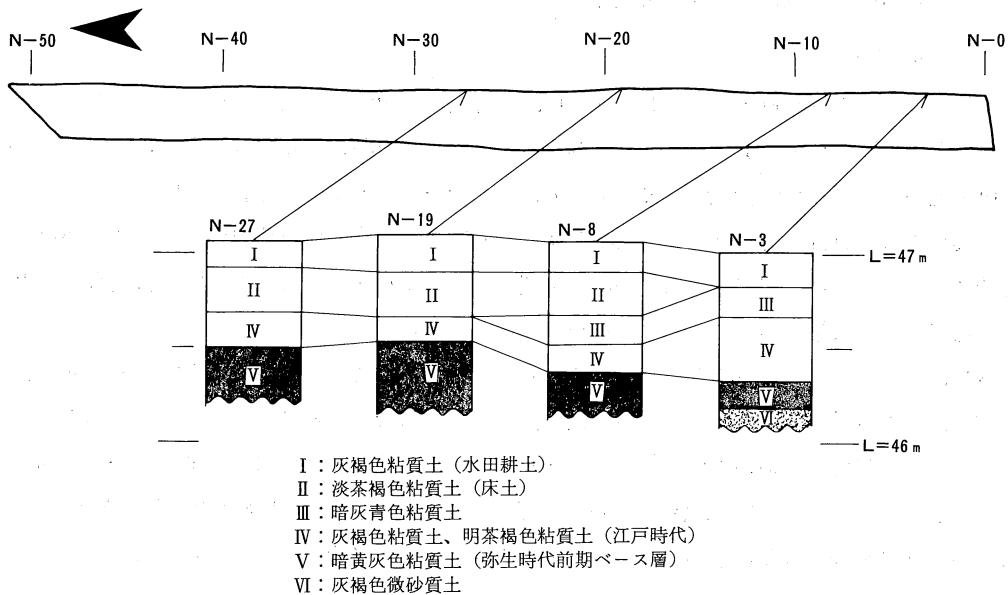
Ⅲ．第30次発掘調査の概要

1．調査の全容

第30次調査は唐古・鍵遺跡の北端に位置し、唐古池の北西隅より北へ50 mの地点である。現在の道路敷下に暗渠を設置する工事に伴う調査であった。この調査地周辺の調査としては、第1次（唐古池内）、第12次（用水路）、第15次、第17次、第18次（唐古池北西コーナー）の各調査が既に実施され、唐古・鍵ムラを囲む環濠を検出している。遺構の検出状況から、本地は南東から北西にのびる微高地の縁辺部から低地部に位置することが推測される。そして、各調査で検出された環濠群（環濠帯）が本地においてもめぐる地区にあたる。

さて、第30次調査は工事掘方に合わせてトレンチとしたため、幅3 m、長さ50 mの南北に細長い調査区となった。調査は廃土処理や工期の関係上、十分な調査とはならなかった。第1に調査区の土層堆積状況と遺構の検出に努めた。トレンチの中央部分を南北に唐古池の暗渠が走向しており、遺構の残存状況は極めて悪いものであったが、弥生時代の溝を4条検出することができた。これらの溝は環濠になると思われる、ムラの範囲を確定する上で重要な調査となった。





第11図 第30次調査基本土層関連図

2. 遺構と遺物

(1) 堆積土層

第30次調査は遺跡の北部に位置する。長さ50m、幅3mにおよぶトレンチは道路とその東側の水田にかかっている。このため、各地点においては第I層：灰褐色粘質土（水田耕土）と第II層：淡茶褐色粘質土（水田床土）がみられた。さらにトレンチ南半においては、第III層：暗灰青色粘質土が広がるが部分的な堆積となる。第II層や第III層の下には第IV層：灰褐色粘質土や明茶褐色粘質土がトレンチ全体にみられた。このIV層には磁器片等を含んでおり、江戸時代後期以降の堆積と考えられた。したがって、第I層から第IV層までは、暗渠施設の掘り方の埋土とも考えられ、遺構面の上部は大きく削平されていることになる。第V層は暗黄灰色粘質土で、弥生前期以降の遺構面となっているが、削平の為時期はわからない。遺構面の標高は46.3～46.5mである。本来、46.5m程で、N-20～30地点が残存状況がよいようである。

第30次調査においては削平の為、本来の遺構面は確認できなかったの、周辺の調査から遺構面の復元を考えてみたい。第12次調査では二つの遺構面が確認され、上層の遺構面は弥生後期、下層の遺構面は弥生前期の遺構を各々検出している。上層の遺構面は安定した茶褐色土（硬質）で、標高46.1～46.6mである。東へいくほど標高が高くなるようである。下層の遺構面は青灰色細砂層等で、標高45.4～45.8mである。下層の遺構面の標高は上層の遺構面とは逆に東へ行くほど低くなる。唐古池北西堤防の外側10m地点においては標高45mの暗灰色砂層で弥生時代の土器を包含しており、遺構面はさらにこれより低くなるであろう。

第18次調査は唐古池内部で北西隅にあたる。この調査区においても二つの遺構面を確認している。上層の遺構面は弥生時代中・後期、下層の遺構面は弥生時代前・中期に相当すると思われるが遺構は検出していない。上層の遺構面は黄褐色砂質土層や灰褐色微砂層で標高46.5mとなる。下層の遺構面は灰褐色粘土層で標高46.2mとなる。

第12次・18次調査を総合し、第30次調査の層序を考えると、弥生前期の遺構（SK-101）は標高46.4mで既に検出しており、他の二調査より高いことがわかる。このことにより、第30次調査付近が微高地上になり、唐古池の北西部が微低地になると考えられる。

(2) 遺 構

本調査で検出した遺構には溝4条、土坑1基、落ち込み状遺構1基である。

SD-101

トレンチ南端で検出した溝で、溝の北側の肩のみを検出した。南西から北東方向に軸をとるもので幅2m以上を測る。深さは0.3m調査するが、完掘していない溝の上層は暗灰褐色粘土層である。遺物はない。

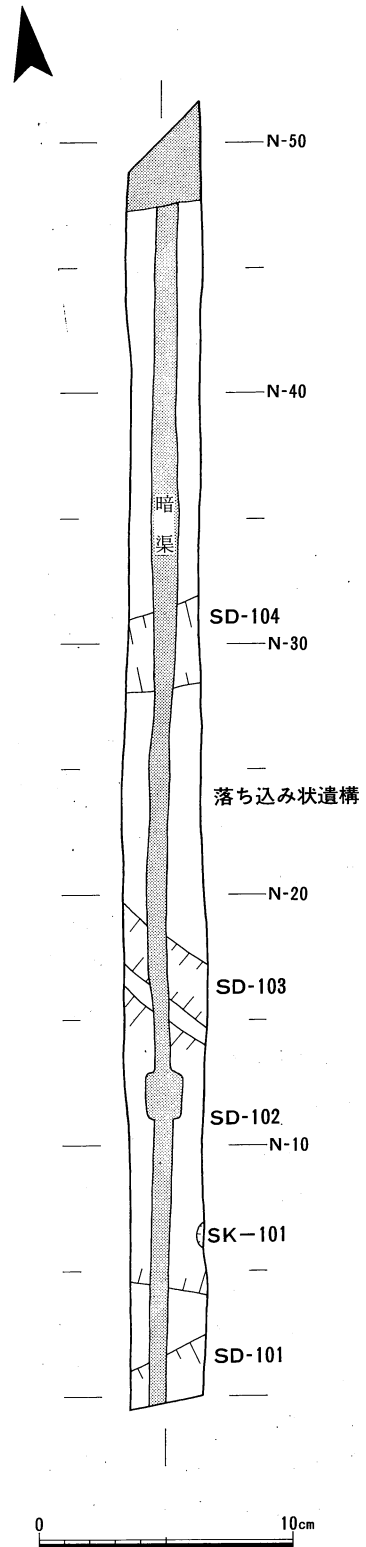
SD-102・SK-101

SD-102はトレンチ南端で検出した溝で、幅約10mを測る。南東から北西に軸をもつもので、溝か落ち込みか判断できない。深さ0.3mまで確認し、溝の上層は暗褐色粘質土、黒褐色粘土層となる。

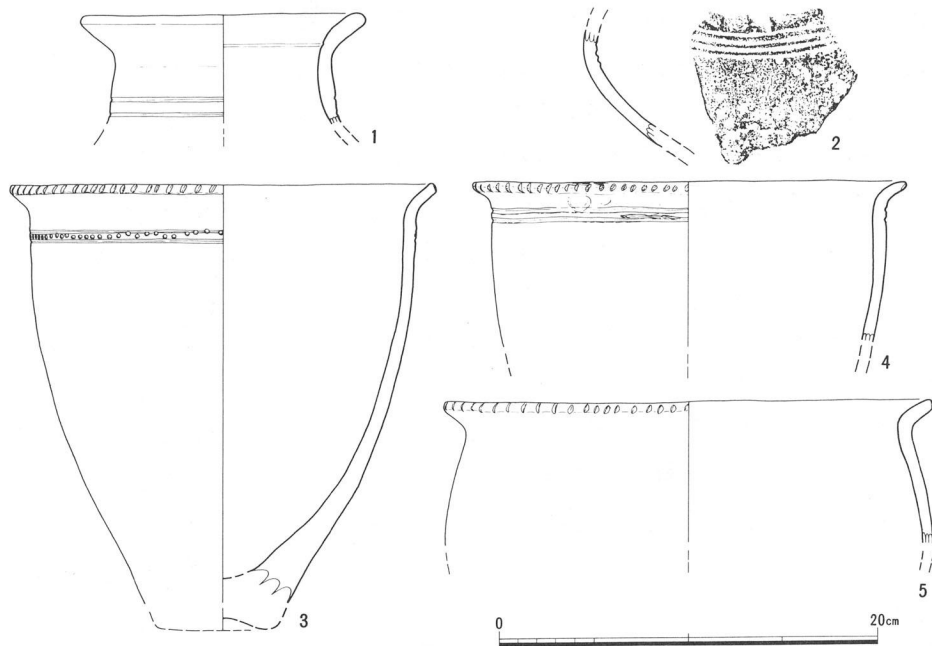
SK-101はこのSD-102の埋土をベースにつくられた土坑で、トレンチの東壁で確認した。径1m、深さ0.4mを測る土坑で灰褐色微砂質土が埋土となる。弥生前期の土器片を検出している。

SD-103

SD-103はSD-102の北側1mで検出した溝である。溝はSD-102と同じく、南東から北西方向に軸をとるものである。幅約2mを測り、他の溝と違い



第12図 第30次調査遺構平面図
(S = 1 / 300)



第13図 第30次調査出土土器（S = 1 / 4）

比較的整った溝である。溝の深さは0.3 m程しか確認していないが、上層は暗灰褐色粘土層である。遺物は検出していない。

SD-104

SD-104はトレンチ中央で検出した溝である。西南西から東北東に軸をもち、溝幅約3 mを測る。この溝も深さ0.4 mまで確認しただけで深さは不明である。溝は二段掘りの形態を有するようである。溝の上層は黒褐色粘質土である。遺物は検出していない。

落ち込み状遺構

落ち込み状遺構はSD-103とSD-104の間で検出したもので、幅約7 mに及ぶ。深さ0.1~0.2 mほどのもので、中央部よりやや北側では推定0.5 mほどの深さになる。堆積土は第1層が暗灰褐色粘土、第2層が明茶褐色粘質土となる。第2層より半完形の第I様式の甕が出土した。

(3) 出土遺物

出土遺物は少なく、弥生土器、瓦器、磁器、石器がある。弥生土器は前期のものが多い。瓦器や磁器は数点である。石器は打製石器で、くさび形石器が2点出土している。

弥生土器（第13図）

第13図-1・3は落ち込み状遺構の上層と下層から各々出土している。2はSD-103上層、4・5はSK-101から出土した。1は壺の口縁部である。口縁部が強く外反する形態で頸部に二条のヘラ描沈線をめぐらす。内面には凹線状の凹みが見られるが、土器調整中についたもので

あろう。器面が荒れていて調整不明である。2は壺の頸部である。削り出し突帯を設け、突帯上に三条のヘラ描沈線をめぐらす。突帯は胴部側のみで沈線をいれ、明瞭にしている。

3～5は甕である。3は口縁部が上外方へ外反し、口縁部に刻目をいれる。口縁部下には二条のヘラ描沈線をめぐらし、その間を径2mmの竹管状工具でうめる。4は口縁部が短くなり、強く外反する。口縁部にはハケ状工具による刻目をいれ、口縁部下には二条のヘラ描沈線をめぐらす。5は体部に張りのもつものでやや大形となる。口縁端部に刻目をいれるが、体部は無文である。これらの土器は保存状況が悪く、ナデ調整と思われるが明瞭でない。

3. まとめ

第30次調査は道路改良工事に伴う調査で、既に道路下には暗渠が設置されていたため、遺構の残存状況は極めて悪いものであった。調査はこれまでの中で、第21次調査とならび最も遺跡の北端にあたる調査であった。その意味において、この調査は遺跡の北限を知る上で重要な調査となった。遺構としては弥生時代前期の土坑1基、溝2条、落ち込み状遺構1基を検出し、さらに時期不明の溝2条も検出している。特に弥生前期の遺構が顕著にみられたことは新しい知見となった。これまでの調査（第12次・13次・17次・25次・27次）においても弥生前期の遺構や遺物がムラの周辺部より検出されており、この30次調査を含め弥生前期の遺構のあり方が問題になってきた。ムラの中心部においては弥生前期から後期まで多数の遺構・遺物を検出するのに対し、ムラの周辺部では弥生中期は少なく、後期は環濠を掘削する。弥生前期は土坑や溝があり、ムラの構造が異なるようである。これが弥生中期の大環濠の成立と関係するのか今後時期的な遺構分布をみていきたい。

さて、検出された各遺構であるが、時期や走向方向を推定すると既調査の溝と合うものがあるが、何分トレンチ調査の為、また、50～100m程離れていることもあり、正確さに欠くものである。これらは可能性としてあげておきたい。SD-101は第12次調査のSD-03あるいはSD-05、SD-102は第25次調査のSD-201、SD-104は第17次調査のSD-01にそれぞれ相当するようであるが、決めがたい。SD-103については未検出である。

以上、第30次調査の成果をもとに今後の課題と遺構の関連についてまとめてきた。しかし、最も重要な問題は本調査地においてもまだ、唐古・鍵ムラの環濠帯の部分であって、ムラの北限はさらに北へのびるということである。さらに水田においてはこれの外側に想定されそうであるから遺跡の範囲は環濠帯の外側に100mほど必要とし、大規模なムラの構造は複雑化の様相を呈している。今後、遺跡周辺部の調査も必要となってくる。

圖

版



a. 調査前の状況（北から）



b. トレンチ全景（南から）



a. 調査地空中写真
(上が北)





a. トレンチ北半完掘状況



b. S D-105完掘状況



トレンチ中央部完掘状況



a. S D-106完掘状況



b. S D-108完掘状況



a. S D-109完掘状況



b. S D-110完掘状況



a. SK-101, SD-107完掘状況



b. SD-107高杯出土状況



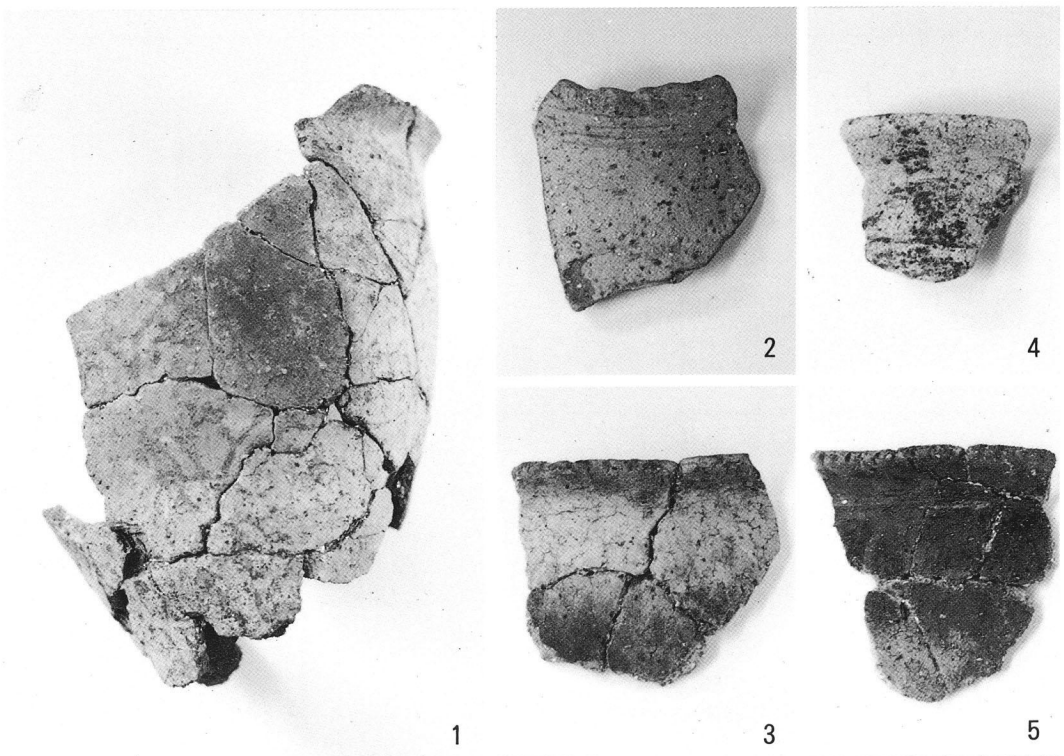
1・2・5-S D-110出土、3-S D-109出土、4-S D-107出土



調査区全景（北から）



a. トレンチ南半暗渠検出状況



1・4-落ち込み状遺構出土、2-S D-103出土、3・5-S K-101出土

田原本町埋蔵文化財調査概要9
一昭和61年度唐古・鍵遺跡第29・30次
発掘調査概報一

昭和62年3月31日

発行 田原本町教育委員会
印刷 明新印刷株式会社